後鳥羽天皇御撰集　全

吃驒文庫

文治二年八月沙門　人丸詠之

春二十首

いはしろのかたをかやまのとよきてをいまさらしめをわがせこがこむとしらなくに

春ごとに野邊にまづさくうめの花たれかはるよをかねてしるらん

梅の花ちるまで春をしらざりしわが身ぞ人のうとくなるまで

春ごとにうぐひすなきてうつすなるあやめぐさこそかねてしるらめ

おのづからあはれをかけよ春霞たなびくやまのうぐひすのこゑ

春霞たなびくやまのさくらばなちりぬとみえてかへりきにけり

春霞たなびくやまのさくらばなちりぬとみえてかへりきにけり

春霞たなびくやまのさくらばなちりぬとみえてかへりきにけり

春霞たなびくやまのさくらばなちりぬとみえてかへりきにけり

春霞たなびくやまのさくらばなちりぬとみえてかへりきにけり

夏十首

夏ごろもうすくやうすけれ
くれぬるもしらでやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ
郭公なきてやすらふ

秋二十首

凡雑

祝之首

公法献年頌三度百首 十二月廿

二首

海山をうつしてやうかゝみ

大方をみな月影にかゝみ

海のくにもとくにくの春乃月

梅ついかうもの秋なれ

嵩

うつのやまこえ丸ほとゝきす

きゝわたるかな

名よ丸こえ丸ほとゝきす

秋

冬ごもりしてゐしものの音なひて
霜をもりもりの春くるほどの
あをうなばらとほきさまなどの
うきものよそなりしこと
みづからの行うをもてこと
ものうきまでおもふ

秋祓

いそのかみふるきみそぎの
ちぐさなる秋やおもふ
ものうきまでうつりゆくを
なげくや神ろひうつる
なげきをもふるきことのごと

釋教

花厳

いにしへの山のふもとの花をみて
行くすゑの山ぢもとほく
行合

ゆくゆくもとまりもしらぬ
ゆきあひの
方等

雨ふりをやめしあとの
般若

池きよくさやかにうつるつきかげの
法花

暁

巻

山路

海辺

千早振神な月

[illegible]振
龜乃おのいそもとたつ白玉乃枝こそ
ひろゑやうゑてちとせ
建仁元年三月四日文台
[illegible]

同

三女前

[illegible]
見わたせは志賀のうら浪こえそへて
立田川柳乃枝乃春風
[illegible]
[illegible]

[illegible]
[illegible]
[illegible]

夏十文前

秋風やいかなる人の秋のそら
秋のそらいかなる人もきえぬれば
こそとうやあめつちのなき

雜二十首

引てゆく人の行末いかならん
秋をおくりの山ぢ独ゆくそら
年ふかき秋の夜ごとにこよひさへ
こよひさへ松こえぬとや
こよひさへ松こえぬとや
浦風こそ吹ふけ
嵐のそよぎ海をわたりて

気なるひのもの磯をもいかに
とまるのこりのきやとやとふ
所里をうたうらやかぬ
やまぬ紫乃うら波
須乃江の松のこえよ
こなれさしてまれ
月のすむまの松乃風
人もさき秋乃空よ
ふるもなかさめるそ
秋のとも海山乃
大空とふるもあ

秋之部

雑二十首

四六月千又百番歌合

三二十首

夏十四首

[illegible]

[illegible]

[illegible]

拍里人乃庵日もそう志ゐ
給とそもや雑波のの一のかた
給海ちうき志乃杉山志ゐ
給志ゐのの毛の下風いそ
給月とそてうつ日以志ゐ
給まきり〻志岸のお松う志
給松のそ乃こうもみそ
給又くもこうしもけよつ

秋之部

給百代これ観りのまそのあ
給百代こそうしの海の

給もゝ志ゐみそ乃猿風
給一百代とうの濱とうし
給うきつゝそ志まの海の

五十之部

給もゝ志のみ毛の九つとうもよう
給秋世月他のうもの神し
給あ乃のなう乃志ゐ毛の
給つあそれなうそて
給ひもゝなそ人そもれむ
給なもゝとこねんうもの
拍里そもやまの英ひまそ

久方の

雑百首

建仁元年三月廿九日庚申撰歌合 十六番 八番日之沙
左枝対勝負

三九

春ふかみ

夏
秋

冬

津の国なにはのうらにまかりてよめる

ひとはいさ我は思はむ都鳥

冬ごもりして春のうらやなぎ

きえかへりうちとけもせぬ我心

見わたせば浪もとどろに白妙の

うき沈みする海人の釣舟

こぬ人をまつほの浦の夕なぎに

やくやもしほの身もこがれつつ

あふことをいなばの山の峰におふる

まつとしきかばいまかへりこむ

雑

みなそこにしづみはてにしわれなれや

浮ぶ瀬もなくなげきつるかな

わがもとにとまれる人のなかりせば

とひこむ人のあとをだに見む

なかりけりいかなる人のすみかにか

涙ひさしく流さざるらむ

呉竹のよよのすみかをたづぬれば

事とふ人もなくてこそ経れ

文をだに人のもとへやりてしが

返事はいかがありてかへりこむ

建仁元年九月廿日 十首 寄

初会待花

雪きえてたのみすくなき山路哉

山路菊

やまとなる人にあふさかの関こえて

山花満

大方はわれもうき身を秋はてぬ

朝鹿

鳴さをしかのこゑよりあけぬ

遠村花

ほのぼのとあかしの浦の朝霧に

島人

しらほすあまの袖かとぞみる

田家花

庵もるやまだの仮ほにあれぬとて

古寺花

そともみぢちりなむ後ぞとどめおく

花似雪

たちよりてをらばやうゆきかとぞみん

河辺花

さきおほす吉野の奥もかくやあらむ

遠野月

武蔵野はけふはかぎりもかすみけり

深山花

春山
春雨
夏山
夏雨
夏月
夏夜
夏夕
夏晩
夏朝
夏昼
夏暁
夏曙
夏天
夏日
夏風
夏雲
夏雷
夏雨
夏川
夏河
夏海
夏浦
夏島
夏野
夏原
夏郊
夏田
夏里
夏村
夏道
夏橋
夏関
夏寺
夏社
夏祭
夏祓
夏禊
夏市
夏宿
夏旅
夏行
夏恋
夏述懐
夏祝
夏雑
夏部
秋山
秋雨
秋月
秋夜
秋夕
秋晩
秋朝
秋昼
秋暁
秋曙
秋天
秋日
秋風
秋雲
秋雷
秋雨
秋川
秋河
秋海
秋浦
秋島
秋野
秋原
秋郊
秋田
秋里
秋村
秋道
秋橋
秋関
秋寺
秋社
秋祭
秋祓
秋禊
秋市
秋宿
秋旅
秋行
秋恋
秋述懐
秋祝
秋雑
秋部
冬山
冬雨
冬月
冬夜
冬夕
冬晩
冬朝
冬昼
冬暁
冬曙
冬天
冬日
冬風
冬雲
冬雷
冬雨
冬川
冬河
冬海
冬浦
冬島
冬野
冬原
冬郊
冬田
冬里
冬村
冬道
冬橋
冬関
冬寺
冬社
冬祭
冬祓
冬禊
冬市
冬宿
冬旅
冬行
冬恋
冬述懐
冬祝
冬雑
冬部

梅下花
柳下花
菅春惜花
初桜
初桜月
花盛
花盛月
花残
花残月

江上月

月前山

月前雪

舟こもる

孤雲

旅泊月

月前野

夕霧よ

月前露

業平

月前秋

旅泊

秋もいさ

當秋曉月

秋もいさ

雪

我恋も

雲

月の風

我独よ

雨

我独よ

雨

あの人と

月よ

雪よ

独よ

あの人の

人心秋のまやこうろぎ

三の島窓

ちりそめもみぢ

三の風亦

ふてゐねさきりのそ

三の船亦

綾古

ちれてきぬ波のもみぢも

三の人亦

えらぶ思ひまゐ

三の人亦

年夜さ雨やむ秋乃なかめ

元久元年十二月八幡北首御會

三云

八やまふもとのうちなびきさよ

霜ふりまよのめさ風みぐ

うちなびきさやふんさ野山あまもりめうら乃事

雅俊

あしたあしたやくもの標よ月霜ふれ

さやまさ秋やふ山風みぐ

こころのきやさもれぬ

夏

云ふれ一夜みそぎ乃夏とふれ

秋

秋きぬと人はいふなり
さをしかの鳴く山里の
こまなれば
こよひもなかむ
こよひもなかむ

秋ふかきさとの風
もきゝさぶる鹿のこゑ
をの松むらとふきはらふ
いそのきよきをうらめしく
四月賀茂より社へ午前御一舎

まこと

賀茂山のあまもしたちの
二見ぐさこゝろのまゝや
そなふる神のかずもおほく
そとはあれ榊のまゝに若葉
いそがれこゝろの山おろし

花ちる庭の井のもれ水
夏六

郭公なれや初音を松のと
呼るまゝの夜なれやなを
なく毛まで換のまゝ月さし
夏のこゝろ月まつよそれ山
夜みてこゝろさ松のかげ
夏と聴てのこる夜そ

秋六

ふるもゝのめぐりあふよ初雁の
羽よりこぼれこゑやそれ

野辺より宿のゆうさ秋ふかみ
もる山おろしの風ぞ身にしむ

秋ふかみ
秋をもなほ
秋をなほ

ヒさらんとおもひ寝よりおきもせず
ヒさらんとおもひ寝よりおきもせず

冬六

かまどやみの雪ふりつもる
おもふこと今はあしの
おもふこと今はあしの
おもふこと今はあしの

おもふこと今はあしの

庭のもみぢ葉の風もとはれぬ
庭のもみぢ葉の風もとはれぬ

さびしさやまさるらん山のかけ
さびしさやまさるらん山のかけ

冬ごもり月日も知らぬ
冬ごもり月日も知らぬ

雑六

賀茂山や山吹をうつす
賀茂山や山吹をうつす

旅よそふくれの花
旅よそふくれの花

山里ふるの花
山里ふるの花

海山もうひ松
海山もうひ松

山もとのかきねのうつき
山もとのかきねのうつき

さしや神のちかひ
さしや神のちかひ

賀茂下社三十首
賀茂下社三十首

雪ふかく

神のちかひもさえてこそ
神のちかひもさえてこそ

雪ふかくおもしろをあらしの
雪ふかくおもしろをあらしの

長妙…さそ秋四のゝ…
…のゝ…かとさゝ…秋乃…

秋

落ちもきあへてそ秋の風
きう秋の物なりやそと
おとろかれぬるかなのうさ
相似体制長入新撰遠カ和遠
雁股うそ乃股
なの矢なりんと色の袖
顕のやまきのをやそ
冬

秋そうそ秋そとおもふ

山ひとのやまの神やの面みんそかのゝ
雲野乃そ乃秋
さゝ…
と秋そうそ煙とそ
たゝ山ともきうもう

雑

あし吹のやの月…
月秋…
こゝろまにもうひの
ゆきとおもふ…
山ゝ…

三

雪ふりつもりやまのうへもすべて乳房のやうにまるくなりぬ

春

うぐひすのこゑもきこえずまだ雪のふりつもりたる山ざとのさま

夏

うぐひすのこゑもきこえずまだ雪のふりつもりたる山ざとのさま

秋

うぐひすのこゑもきこえずまだ雪のふりつもりたる山ざとのさま

冬

うぐひすのこゑもきこえずまだ雪のふりつもりたる山ざとのさま

冬

冬ごもり風いたうふきて雪ふりつもりたる日

ぬばたま(ぢ)の夜のふけゆくままにかきこもり雪ふりつもる

冬ごもり夜のふけゆくままに雪ふりつもるなるらし

雑

神代よりふりつもりけん雪なれば千年の松も折れざりけり

ふりつもる雪のうちにも春はきぬ消えてうれしき初若菜かな

春

春立つと聞きつるからに鶯の鳴くべき声も聞こえざるらん

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや風の吹くらん

春風の吹きにしよりぞ吉野山峰の白雪(しらゆき)とけまさりける

新拍子

うぐひすの谷より出でし時よりぞ人の心も春めきにける

後なる

ももしきの大宮人の花の色に心うつろふ春はきにけり

第元二年二月内裏にて三十首歌めされし

春

春立つと聞きつるからに鶯の鳴くべき声も聞こえざるらん

春霞たなびく山の桜花うつろはむとや風の吹くらん

春風の吹きにしよりぞ吉野山峰の白雪(しらゆき)とけまさりける

千載 ゆるやかなるけしきも

雪とのみ降りしく花を見てしかな

千載 吉野山

もろともに花なき里にすみわびぬ

春

うぐひすや若よたてそふれの雨ほの世
都そよそよたつもの霞うす山のみどり
うき世とやちのつゐ山のけむりさへ春
行方
時るやいつ井のそこもゆるほどぬやさぬかたらひつゐ月雨の
きえのこるもゆるよれ山もさそへ人もゝ
まつもきむひの景色秋のうきをそ
うき

秋

人恋のわくら葉そこなつへて秋の初
なそもすゝろ物むつ他の身もそ秋をそ
三つ乃山のそと芝よりつまそれ雨
ぬ

冬

とくまくらやまもはくれ山たうよ海のそひらまの
山里の夜まこもさむさ雪乃あしたを
あやしくも夜乃まつ冬ゝれそかみむをよ
うそきれそよ雪をきむさ夜のつゐ
頭のそときハ乃あのてれとそのうれ川風

雑

かうあるや秋後のよこそ
きみまてそんかちよなき
よそあるさうむまもも
世中を減よいとみ人やあ
大そうちうき里ひのと
秋後山あるんのあさ
旧外宮三十首法
会

後拾
白妙の秋の神人わたつ山野
百ふるかなもともいみ
よ秋の後やきさ

夏

大そいうきみを
なる先屋とを山松
吉野山さうのやそ

夏

いつ迄をうの神
新古
山里さうのかよ
又月つまを
秋ちうくさ
六月や一もきま
寝さうひ長
秋

かうあるや秋後のよこそ
きみまてそんかちよなき
よそあるさうむまもも
世中を減よいとみ人やあ
大そうちうき里ひのと
秋後山あるんのあさ
旧外宮三十首法
会

後拾
白妙の秋の神人わたつ山野
百ふるかなもともいみ
よ秋の後やきさ

夏

大そいうきみを
なる先屋とを山松
吉野山さうのやそ

夏

いつ迄をうの神
新古
山里さうのかよ
又月つまを
秋ちうくさ
六月や一もきま
寝さうひ長
秋

[illegible]
新古 [illegible]
[illegible]
[illegible]
[

わすつむ玉川の茅ふき
吉野山
ふるさとの花の枝折
三輪山
三輪の山杉のこずえ
龍田山
錦ふもとの秋もうつろふ
沼瀬山
はつせ山ふもとのさくらみやま杉
難波潟
難波潟やあしの葉

檜垣のうつきたるもの

大井川

大井川流のうちにひらくとなりとほく

島田

大井越うつゝの清きうたゝ月

伏見里

年ふればほとゝぎすのうたよめる

泉河

泉川うたよめる

小塩山

年ふれば山とおのれのうたよめる

雷坂

雷坂やきゝうたおのれ

志賀浦

志賀浦のうたおのれ

鈴鹿山

鈴鹿河うたおのれ

二見浦

二見うたおのれ

大淀浦

おほよどうたおのれ

鳴海潟

[illegible]
渓の橋
頼こそ絶なきこゝろ
富津山
見くるれば人もまれなる
佐ゐの外里
[illegible]
[illegible]
清見潟
[illegible]
富士山
[illegible]
[illegible]

武蔵野
[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegal]

垣竈濱

[illegal]

建暦二年十二月十首 [illegal] 中 百首

雲

[illegal]

[illegal]

[illegal]

秋

[illegal]

[illegal]

[illegal]

[illegible]

[illegible]

[illegible]

池上月

ひさかたの池のみなそこ月数や有しとうへも統なるらん

野亭忠岑

久堅のこえきうかれ秋ふかみ露あまてらす月の九月四方千会

秋風

四方よも吹つとまてて秋をやれ禊川乃さえ渡る哉

萩草

新撰
まきてもつるしる人のあれしのおもよ

萩花

九重のみとのまへの萩の花ちるんをもうらめしくやる

菅丗雅

夕さいろのうつろふ花ゝかりきこゝろありてやわきてをるらん

河鳥

郭公こゑもいろいろ聞なれてなをおとやすしくらし

海月

秋の月波もとゝかくうきぬれとなをもさえくるものゝうら哀

山風

うちそみちなをふきれらむ山あしよつゝ秋乃吹雨よ

暁雪

なをもしくるゝとまりをとふ人の有明の雪

月無

[illegal]

夜松

年ごとにおもかげかはれ我宿の松よそうとぬく

九月晦日三吟

月舟

忠良勝

あとをまてたえうりをふく秋乃月

定家持

暮見ん紅葉

若しまり秋の日数もあらしやさおもとふく入逢乃

雑俊持

暁更別離

ちぢくめや吹こまぬく秋乃風

十月一日三吟

同前

保季勝

一のそまでなりよこそ浦のくれ

菅湊舟

初冬

前右大将持

山河や岩まのあとのくもあしよちめみとりつゝ

松野卿

定家持

おもふよりうつろふ色をみなれ

日日三吟

同前

[illegible]

雅経勝

あるよ振こそ山の紅葉さくゆふ

東路月

定家持

もきてとをふりやそうを秋の空

[illegible]

四十一月十一日 新宮千人當座

秋の夕風

持 奥親 ちくやあるあるのむらき秋さもる

海もと家

会主 勝 人もおしや雁渡るこゑ

古郭公

会陪 夏 あるしたりこゑりこゑ

来連 持 秋をいつよさむきものかなの月

山叫雨

会家 立田山夏ふかみ秋さもる

四十月七日新宮千合

お楽みの枝

はせをもあしよみこそ

会奉 梨大

雪さゆるよし野おしも埋火の

海濱金吾

寒き夜の月をなの絶てふのう

日十月八日新供千合

當山宮

冬ごもるよしのの奥も吉野の奥

古寺月

日二月十八日新供九千合

梅香留舶

梅ちるをふく笛竹の音よとや

琴柳雨春

柳ちるもとめてもとめてもとめえぬ

ちるを蹴鞠

山川乃苦れるものの見はてぬ

古郷山水

ふるさとやむかしの春も月もかな

雨中菊薫

ちりつもるのこりしきたる

新徳

くれもとめてもとめえぬ

山家雪去

雪消遠樹

雪消遠樹

雪中鬼哭

雪後郭公

松下納涼

山家秋月

ぬ
ぬきの戸やうちもさゝれて山の月
　　湖上晩霧
新修
志賀のうらやよりてくる沖を
ぬ
風吹て寒き草
月
ゐ
そよろ霧のやうなるよあしよかけ過芦のま
　　寄似恋
ぬ
忘やうれうき事ありまの山
　　寄弁慶
弁ら
弁ら
や八まの松ならでもそれ
遇不逢恋

○按年表ニ明和四年ノ作ト有

明日歸庵即事 仝作

千風夜涼

夏もはてうつり行月とともに

山家之月雨

そま路うれしく袖も今ハわろと

明日ハ隣南もこの合

秋立秋ぞ

ほとゝぎす秋乃山をハ出ぬ

雨中即事

やれほろとのこる夏月のむし雨よりもとめてぞ鄰ぶられ

雪亭ノ山荘

やしろの姫うさき夏の巻

明日七月九七日雨庵即事 仝作

養山遠屋

そこりなくこゝの秋とてとぢこめて

明八月三日歌仙興行ノ人ニ贈ル 仝作

初秋晩窓

何ゝまそうれ窓やハ神なとて秋ハよそるあるつきて飛

閑居秋風

夏ごろも月をたゝなるきこえ

旅月警露

夜とろ〳〵月ハ名ごりをひろときほるれゆきゝ

仝筆也

初恋

久恋

月前松風

月お樽え

海辺秋月

湖上月

新後

深山暁月

野月寒冷

新後

田家見月

月前雁

雲ゐなる顧の秋さり定めてや

月前旅

旅の空秋のなかばもとうそ

月前恋

雲ゐなる月よくさしも詠してこ

思ひ初めけん

日十二月二日新作の人〻

通具卿

名取川冬の月

山部赤人

あしの音の風

為家卿

夜ふかく松よりし嵐吹き過ぎて

初恋

大江為基朝臣

大宮人袖なつかしう思ひそめ

日十二月十八日

社頭松

伊勢

忠良卿

晴し山あとをしめ清き

月前雪

日

山ふかみまだき雪と吹き

旅宿風

日

笠松山もとりもあへず吹く風に

日二度正月十三日

初春十五

百代のうつめ我まとまもる初風の松うつ夜

春山月

霞うつ木のめも春乃ふれを見のうくいけう雪月

野辺霞

梅うつ香の我ほめもやうやうみ人乃ゆきゝ

日二月十日新体詩人

海邊霞

通具卿
うち詠むるかうもも雪ぬ乃よ

野九
忠良卿
皆日代乃ふもいまう波乃よ

忠憲

流よめうつせおのゝのまそう雪ぬ

日三月七二日うち秋や月いつもおのうき秋

歌舞音曲

屋うへ乃うつよ乃ふ乃いうれや月いつもおのうき秋

夏 後集題三体和乃二雁九ハ十二世ノ十アリ

なつの夜乃ふ乃波うき秋の風さむう拂よう乃う音

秋

雪

おもへはあとも月夜乃ふ乃ふ秋うく吹

冬

おもへはあとも月夜乃ふ乃ふ秋うく吹

恋

いつはとも秋をも海のうらかぜに

旅

をひ夜きぬ有明の月やのこるらん

日こ月同じ題にて百首の内

雪さえ

こほりしもやのやどりにも

日文月歌仙の会

暁の時鳥

とをちかた人もねやさめてきけ

社頭雪深

夏山のたえまをつたふ谷水の

遇不逢恋

わすらるる身をばうき村雨のつまなくも

日こ月文月瀬鶏聞恋の会

この上夏月

秋きぬと目にはさやかに見えねども

海辺こ月

はの風のおとにぞおどろかれぬる

山家初風

柴の戸をおしあけもせぬ夕暮に

初恋

大江ゆのをいでてみなの池のつゝみ

　　恵慶

なをきこゆまもりのやなかの虫

　　久寛

おくつゆのよもきが露よりかゝるらん

　　月前虫

こゝろそも月よりあれやあきの夜を

　　月前風

なくなくゆくとあきのるをしる

八月十日新作千人河原

秋をへてくもりもとめぬ月の色

　　夜風松雨

松をいくよの風の月よりなり秋の神乃

　　浦虫

きくことを海の門よりもれぬるか

　　月

月のすめるやよろづの有様をの会ぬ恋

　　雲

新後

そもいつくさぬまの菰をあめもちぬ神の

　　秋恋

[illegible]

冬之意

[illegible]

暁窓

白露のおきそふ秋の[illegible]

[illegible]

[illegible]

野色風
もろともやのゝ草ふかみ
四季月
ちゝそふる小田のうねのこまくらも
霧
秋ふかき露よりおくる
名所月
月ごとにうつりかはれどもろともに
旧友書座中会
あとたのむ秋のまもるに
旅月
旅ねする草の枕に
百十月ごとの
秋のくれまもなく独ねまくさ
四雨
もろともやよしてはふるさと
名所時
ふるさとをこゝろにかけてもろともに
小野社(イカ)中会
月十月日当座
四雨
ふるさとをこゝろにかけてもろともに
恋

[illegible]
[illegible]
[illegible]

[illegible]
日七月廿八日鄉亭會卿相追善の會

翁草花　　羽笹

寫生繪

横雲や雨こそ晴れ山の端

海もと月

[illegible]

[illegible]

爵中善

[illegible]

[illegible]

日日當座句合

曉雪鷹

[illegible]

[illegible]

田家麻

[illegible]

[illegible]

[illegible]

深山霧

[illegible]

[illegible]

[illegible]

日月中後日當座句合

湖月

みほの海のまもりあるらん秋の月

暮山雪

[illegible]

[illegible]

行路風

[illegible]

[illegible]

日月中當座句合

きよくされ（九ウ）おもおもしき樣のひとやもしらんうらやましくも八尾なれ

社頭述懐

（裏ニ）こゝろやりつゝ世のうき筏士のみをおやふねかん

（承元二）日日賀茂うち社千句

湖上暮雁

羽風こゝすきうち春よ又やあのそうふく海うつる雁そ鳴なる

雪山雲雨

冬野やゝ雨さへひらぬもとれぬもさそふみぞれ

社頭風

和ふのの浦こゝろやとよらんむをさゝよやいなむこゝや

日二年三月住吉社の会

（九オ）

寄月祝

行末をなが月もつきりかく澄ん

恋旅恋

もゝ草の山ともそうもたゝくれてまれ逢夜の面影

恋の山雑

おく山のみこゝろやうつもそそあつ世とうき

月同四月二日

雨中の祝

ちつるくれ雨のまの庵にて山のるひとこゑ

遇不遇恋

あるそてもかりねきえの山やいちはし扇の風紋

寄述懐雑

[illegible]の枝のよろめくを

同四年八月十一日

雨中菊

雨ふれどつゆ浅みかも植ゑおきし

同九月栗田文代之の人

寄海辺

とまりする一夜のうちもさやかれを

寄山菊

名も無き山に入るのうもよるまでも

三月廿日

中くよろづ世よりも多くの月をしぬ神よはぬまでも

建暦二年二月廿六日

於北嵯峨山荘

峨もなほうもれよのうもきく花ちる時をそれだにも

秋ふかくそらうつりの去れども

九月九日 建保之 同三年七月廿九日

初秋風

[illegible]

こととなるつまもまつ秋の初風

山家菊

山里の垣ねの下を秋ごとに

社頭雑

夕河雨いろいろもみぢまれる
建保元年十二月廿四日御會　内府家當座

冬月

綾古
さえわたるやそのうらなみこえそめて
こなたをうつすみそのそてかな

夫のたえまもなくみの月かけのひかりあかすも
新
小忌衣うつる色かなゆきの夜の
月を言もてなりけりさこそ乃
淺茅生
元久二年二月廿九日御會

雨

おもひやるこころさへこそ乃
雲間

大空にのめる雨もやかてまた
四月撰千人

秋十首

玉
秀綾
春霞
たつ花をうつす花よりはるかなる
玉
綾古
面之綾
ゆくへなき風をあやなく
新子
方屋綾
なびかすとうらむる秋の夕かな
綾古
山めぐり秋のこのはのそともなる

秀能
みしま江のうへのこもせ秋のよの月
秀能
のこりなくすめるもうれしつゆもまた
ぬかりし秋のかげかな
いくそたのみのみちのおくもかな
同九月百首
暁山
おもひ入色にはあらしあさぢふの
秋
よもよりもやそうらはみるらむ
同九月十四日
月前秋

久癒

松梨

一番

二番

右前花
ふるさとやまもいやうすく
花ばなのあまりにしろき白雲
ひきうゑしかきねもそこと
なりにけり
かすみこめたるやまかつの
吹よりかぜのうらめしき
さけのうへにも花のちりかかる
春のをしまも惜まじ
やまかつのかきほにちかく
やどりせば
三番

左勝
春野川
さくらばなちりかかるとも
なかれなむ
さほ姫のそでのうつりも
せうがやそれとみえて来よる
ふくかぜのうらめしくおもふ
乃もそのうつりやすきは
うたかたのあはれなみもまもるき
うたかたのあはれなみもまもるき
四番
を暁は鳥

六番

左勝

久堅乃雨後月

右

初もみつきてまつ人もなきさ

ふるよあるとも久かなくに

七番

左山時雨

右

なかつてみつかもれてきいせ寒

うきもうらみもなくて但　みれは

八番

左

九番

右

十番

詠古合

水卿春望

朝霞

續古 志賀の山越にて

建保二年二月

春雨

續古 建保おそまき代のころ

山花

山桜

寛永二年七月遠島御赦合

[illegible]

文仁元年九月十三夜 新供等合

遠山暮風

秋の来月もろ見のそ[illegible]

[illegible]

[illegible]

同十日九日薄代まつ
野経月明
月ふまつ野くの方をうち村ふまつ
おのれ
暁初雪
雪のをふまつ
三治二年十一月八日勅修寺合
暮山雪
みふまつ
遠寺雪
建仁元年十月十日那智山
遠寺雪

日
雪をさまつ
雪

永禄二年七月遠寺

建仁元年十月十四日 河

雪間波

雁帰る波こそいとゞ

河上の霞

深風

元久元年七月

水月

建保四年八月十日御経供養

承元二年七月遠島

山家

建仁元年十月十五日

澄月

後京

[illegal]

[illegal]

[illegal]

明治十六年癸未九月山中獻雜詠